

氏名	あ だち あきら 足 立 明
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 1585 号
学位授与の日付	平 成 2 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	LABOR EXCHANGE AND PEASANT AGRICULTURE : A CASE OF SINHALESE AGRARIAN SETTLEMENT IN SRI LANKA (農民社会に於ける労働交換と農業：スリランカのシンハラ農村の事例から)
論文調査委員	(主 査) 教 授 高 谷 好 一 教 授 森 田 學 教 授 福 井 捷 朗

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はスリランカの水田稲作と焼畑耕作における互酬的労働交換を、それら農民の意志決定過程を中心に考察し、その実際の行為における、また経済における側面を分析したものである。

第1章は序説部で、本論文で議論されている問題の所在を明らかにしている。すなわち農民社会における労働交換は農作業における“骨折り仕事”(drudgery)の最少化をめざす経済交換であると論じたうえで、稀少財としての交換労働の需要と供給が、価格もしくは交換率の変動なしに、どのようにバランスしているのかという問題をたてている。そして、この問題を実証的に検討することが、これまで明らかにされることのなかった経済的互酬交換の本質を明らかにするものと主張している。さらに、このような交換行為を分析するのに最も適したものは意志決定過程の分析であるとして、それを実証的に検討している。

第2章では、本論文で検討される労働交換の舞台である三つのシンハラ農村の概要が紹介されている。三つの農村は、ひとつが自給的な伝統農村であり、あとの二つは商品米の栽培を行なう比較的新しい入植村である。

第3章では、労働交換を含めて協同労働全般の種類と、そこでの制度、実際の運用の関係が論じられている。

第4章には、労働交換とその他の相補的労力動員に関する意志決定過程についての一般的なモデルが示されている。これは多くの農民に対するインテンスブなインタビューと参与観察にもとづいてえられた結果である。ここには、世帯構成や耕作面積に応じて、どのような労働交換の量・質が決定され、どのように“骨折り仕事”が最少化されるかが示されている。

第4章で示されたものは意思決定過程のモデルである。具体的な事例となるといろいろのものがある。第5章では水田稲作と焼畑耕作の実際例について、これらの農作業の各段階にどのような労働交換の利便性が選択されているかを具体的に検討している。

第6章では労働交換における互酬の不均衡に対する寛容さを検討している。どのような状況で彼らは寛

容になり、どのようなときに寛容でなくなるのかを論じている。

第7章では、三つの村での労働交換の意志決定とそれに続く実際の組織化の事例が示されている。そして、この事例の検討を通じて二つのことが明らかにされている。ひとつは、労働交換の“需要”は、各世帯における労働交換の組織化の結果確保された“供給”によって満たされているということである。今ひとつは、不均衡に対する寛容度の違いによって、村内に異質な二つのパターンの交換労働の流れが生じているということである。

第8章は総括の章である。ここでは、農民は結局は“道徳的”でもなければ、また“合理的”でもなく、“倫理的”な現実主義者であると結論している。労働交換は単なる文化的遅滞や前資本主義的経済の残滓ではないわけである。それは農民の現状への積極的な適応形態なのである。こういう認識のもとに、筆者は最後に互酬的経済交換の一般モデルを提示している。

論文審査の結果の要旨

アジアの農村社会では貨幣経済の浸透とともに協同労働が消滅し、農業労働者が登場してきた。だが、このような一般的な傾向にもかかわらず、現実には今なお、多くの所で協同労働が行なわれ、さらに一部では増加している地域すらある。伝統的な村落共同体と不可分と考えられてきた協同労働が共同体的関係の薄まった貨幣経済下の農村社会で、なぜ今なお実践されているのか、これが本論文の問題意識である。

農村社会における労働交換は複雑に絡みあった生態的・社会的・経済的要因に規制され、多様な様相をとっている。ここではこの多様な交換行為の核心部を理解するために、意思決定過程分析の手法を適用し、ここに、各種の状況における意思決定過程のモデルを作り上げている。このモデルは異質な三つの農村からえられた膨大な民族誌的・統計的資料に支えられており、その説得性は高い。本研究で特に評価されるところは次の三点である。

第一に、労働交換の動機づけを“骨折り仕事”(drudgery)の軽減にあるとし、それを論述している。市場経済が浸透し、賃金労働が存在するようになってからも、いくつかの農村ではなお労働交換が存在することに着目し、これを論じて、著者は労働交換は単なる前資本主義時代の残存物ではないとしている。ここにおいて、著者の述べる労働交換は、いわゆる単純協業のそれに相通ずる。しかし、ここではそれが農業活動のほぼ全域にわたって現れ、したがって農村経済の根幹にもかかわるものと分析している。これは旧来の労働交換の分析が文化に偏しすぎていたことから考えると、評価に値すべき点である。

第二に、上記の論考をしたうえで、筆者は文化面の再考をしている。ここでは筆者は互酬であるべき労働交換の間に見られる不均衡に着目し、同じ制度的枠内におかれたとしても、各農民はその立たされた立場に応じて、“道徳的”に振る舞ったり、“利己的”に振る舞ったりすることを多くの事例で示している。そして、このような農民の行動を著者は“倫理的現実主義”として見うると主張している。これまで、アジアの農民の行動は“道徳的”か“合理的”かといった両極の理念型にのみ分極して議論されていたが、著者はここに全く新しい視点のありうることを指摘したわけである。この点は評価できる。

第三に、以上のような分析をもとに、著者は互酬経済交換の基本モデルを提示した。今後現れるだろう同種の研究に対して、このモデルの与える学問的影響は大きい。

このように本論文は労働交換を総体的に分析した研究であり、民族誌的にもまた理論的にも新たな視野が展開されている。熱帯農学、農業経済学、経済人類学、農村開発学の発展に寄与するところが大きい。

よって本論文は、農学博士の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成2年2月27日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、農学博士の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。